

も聞く。

一八八

私を満たすものは  
霧のなかの燈火の如く  
恍惚として精氣溢れ、  
愁ひに似た楽しさと痛みある懐しさが  
仄かに燃える氣持である、  
足は落ち葉を踏み、手は枯れ枝を折るとも、  
ここにある凡てのものは我であり、  
虚空のなかに嚴かな光を放つて  
咲き誇る純白の花房はなの如く靜まる私。

忠實な犬はつながれながら近づくと未知の人の蹠音を聴き、  
魯鈍な猫は鶏小屋の屋根に眠つて  
消え去つた小鳥の匂ひを追ひ、  
高慢な雄鶏はごみだめの上へのびのびと歌つて居るが、  
之れ等凡てを崖の下遙かに見おろして  
林の道は朗かな明るさに黙し、  
木の間洩る日差しの柔い接觸が  
幼兒のやうに私を慈しみ、  
落ち葉のなかに秋の喜びを心ゆくまで受けさせる。

一八九

流謫の身は反つて冷やかに  
 透徹な空の下に落ちついて  
 も早や思ひ煩ふことなく、  
 いたづらに枯れ葉の、一つ一つと  
 美しく舞ひ落ちるのを眺めるのみ、  
 吹きすさぶ風は空高く渡り、  
 時々啄木鳥の鋭い聲に呼び覺されて眺めても、  
 梢ばかりは立ち騒ぐが  
 土を踏む足はゆるく單調に、何時までも心深い寂寞の世  
 界を歩む。

(一九二四年 十一月二日)

### 草むら

秋の日ざしは黄ろく  
 草の香りは柔かい、  
 空に飛び散る小鳥の群れを眺め  
 ゆつたりと腰をおろして  
 パイプをくゆらす黒服の人

軽々と浮き雲が流れると

冷めたい微笑みで見送るらしい山々に  
 青い影が横に落ちて、  
 家を建てる木の音は  
 もの寂しく地面ぢべたを足踏みする。

間もなく冬が来るのだらう、  
 虫共は最後の夜會を開くとでも云ふのか、  
 明るい葉っぱの上を  
 パチパチと飛び交ひ、  
 上機嫌でとんぼ返りを打つて居る。

さあ、もう之れで暫くは青空ともお別れだ、  
 草原のなかに寝ころんで  
 うつとりと日あたりの暖さを楽しまふぢやないか、  
 白い犬が主人のそばに長くなつて  
 藪かげを通る轍の音を追つてゐる。

鋭い百舌鳥と鳩の聲が朗かな空を突き切る時、  
 風は野面を冷めたく打ち、  
 慄えるやうなはかなさで  
 一面に咲いた辛抱強い草花が  
 昨日も今日も貧しい色を取り取りに空しく見せる。

然し晴れやかにものさびた日ざしを  
草むらの上にあびて  
黒服の人は黙したまま  
白犬と一緒に耳をかたむけ  
廣びろと秋の心を聴き入る、  
黄金色にがねいろに熟した明るい風景。

(一九二四年 十月二十六日)

### 海の瞳

一杯に見開くつぶらの瞳に  
清らかな黎明よあけは  
よろこびの涙のやうにしみじみと  
靜かに、明るく昇つて来る。

晴れ渡る透明な大空を見上げて  
海の瞳は深く澄み

残る隈なく朗かに燃え、  
恍惚として呼吸をとどめる。

今、幽暗沈鬱の夜の交響樂は  
はたと消え、

莊嚴な沈黙が餘韻長く  
蒼穹より大地へ轟き渡る。

澄み切つた海の瞳に

早くも朝は愛撫の微笑をうつし、  
底なき淵の不思議な深みを

賢い魚は忍び忍びに浮き上り來る。

解き難くも美しい神秘を見つむる  
海一杯に見開らいたつぶらの瞳は  
暗く、明るく、將玻璃の器の如く透明で純潔、  
何ものにもけがされぬ幼兒の心。

無心に見上げる虚無の空には  
あけゆく夜の帷幕を通して、  
薄桃色に煙る一脉の巍峨たる連山が  
遙に遠く、結晶せる宇宙の意思とも見えまがふ。

水晶瑪瑙瑠璃琥珀と

色さまざまに變化する海の瞳の

蠱惑深さに、

人間は死なむことを願ふ、靜な悦びの曙が來た。

いつまでも空を仰いで

はつきりと見ひらく巨大な海の瞳は

涙のはれた爽さに微風の冷めたい吐息を含み、

清々しい智慧が日の光と華やかに輝き初める。

(越中宇波にて、一九二四年 九月二十一日)

### 木々の手紙

林の奥から來た風が

冷めたい清らかさを以て

愛撫するやうに面を吹き過ぎた、

正午は近からう、

時は充ち、光は空に満ち、

頭は澄み切つた泉のやうだ、

手近の木々の葉を摘み取つて

一枚一枚

私の心の明暗を書きつけ  
わが生活の呼吸を君に送らう。

草々のしめつぽい小徑を踏む

樹々の茂り深い山かげのひと處、

柔かい朝の空気に

私の胸はふくらみ、私の生命いのちは盛り上る、

私は丸太の上に靜に座し、

頬杖を突いて

黙りながらわがからだの上に

流れゆく自然の心を感じようとする。

赤松の梢は

遙かななか空に枝をひろげて、

立ちならぶ幹は素はだつ裸體かの男のやうに力強く、

ひろがる枝々の間に

ちらちらとのぞく小さな青空は

播きちらされたあやめの花びらのやうに美しい。

樹々で鳴く小鳥の囀りは、まるで

高い所から呼んでゐる友達の聲のやうだ、

晴れ晴れと勇ましく

またしみじみと愁はしげに

呼び交はし、

枝から枝へ飛びうつつて

幾度も幾度もわが頭の上に来る、

小鳥の喜びと悲しみは

私の喜びと悲しみであり、感情の移り變りである、

私は彼等に口笛の挨拶をする。

太陽は南に廻つて

遙かな高みから

木の枝越しに光を林へ投げこんで来る、

虹のやうな輝きが

木々の幹を切り開いて

俄かにあたりは明るく、

雪崩れ落ちる瀧津瀬のやうに

限りなき力を以て

新しい自然の心が滔々と流れ落ちて来る。

わが生活は高く揚げられ

私の舊い感情は洗ひ流された、

私は朝を呼吸し、自然を呼吸し、林の木々そのものを



呼吸する、

私は林のなかにとけこみ

小鳥達は私のからだの上にとまつて囀る、

之れ等は皆一つのものだ、

彼の赤松の幹と同じやうに私は年取り

彼の楓の若葉と同じやうに私は若い。

黙つて座つてゐる時私はここの土だ、

立ち上つて両手を差し伸ばす時私はここの林だ、

流るる感情の高揚を以て

心の底から唄ひ出す時私はここの小鳥だ、

正午の微風は木の葉をざわつかせ

私の面<sup>かほ</sup>を吹き過ぎる、

友よ、

私の心には何かしら充ち満ちて一杯だ、

それは幸福以上の幸福、喜び以上の喜びだろう、

土、人間、立木、小鳥の一緒に感ずる

この法悦で一杯の木々の手紙を

わが生活の呼吸を君に送らう。

(法然院山林にて、一九二四年 六月廿八日)

## 智 慧

白晝まひるの渚を唯一人歩いてゆく、  
足もとに砂は崩れ、

海草はさらはれ、

純白の貝殻はきらきらと波の下に消える。

大空の下の荒磯を歩いてゆく、

沖には難破船の帆檣マストが揺れ、

かなたの砂丘の上にたわむれる子供等は、  
息を限りに叫ぶけれども、その聲は悉く風に奪はれて  
しまふ。

海鳴り吼える断崖の岩から岩へ歩いてゆく、  
ゆるやかに飛んでゐた鷗も見えなくなり、  
蒼穹あそぞらばかりが艶々と美しく、  
重々しく、輝やかしく頭の上に蔽ひかぶさる。

私は歩いてゆく、眞つ直ぐに歩いてゆく、  
足下の巖にぶつかる大浪は

激しい水沫を顔に吹きつけ、

沖からの暴風は眞白の浪頭に乗つて海の上を支配する。

死は海の上を駆けめぐり、

私は黙々として静澄な永遠の光を夢見てゐる、

鹽辛い死の息吹きは心の面に吹きつけるが、

澄み切つた生命の眼は無限の蒼穹を見つめてゐる。

海と地との諧調に耳をかたむけ、

生と死との歌に揺すられて、ぱつちりと、

揺り籠の嬰兒のやうに見開く眼は、

益々深く吹き荒れる暴風と浪を眺めながら、

無限の蒼穹はその上に廣々と擴がり、清く、明かに、  
涯しもない。

(一九二四年 五月)

## 曙讚歌

深海の底の如き静寂さが

靄と共にあたり一面とちこめてはゐるが、

既に彼の山の巔は最初の光に

くつきりと黄金色に染め出されてをる、

黎明の尊く將清らかなる美の面貌を跪きつつ祝ぎ奉る。

七月下旬 盛夏の朝の狭霧は

ここ高原の懐の遙かな谷間より立ちのぼり、  
徐々と消えてゆく、その指さす方は  
限りなき紺青の半ば暗く、半ば明るい曉の天の星。

目覺めた鶯は緑深き森の奥より、  
晴れゆく空の色調を柔に唄ひ流し、  
朗かなる聲に飮して

谷川のせせらぎの之れに喜び和すれば、  
生命は夢より現へ、静かに盛り上り來る。

汎ねく空に傳はる妙なる香氣。

彼の高山は龍涎麝香没薬の限りをつくして  
不斷に香を焚き燻らせ、

見えざる煙の精氣の如く

西に靡き、東に流れ、地の上にかぎらふ光。

次第にひろがる空の碧

草の上の露は燦めき散り、

その間を踏みゆく眞つ白の足、曙よ、爾の愛撫と慈悲  
の御足、

歡喜の黄金と赤とを一杯に播く。

仄かに青く靄から抜け出た向ひの山の  
廣やかな中腹に、

放牧の牛の群がゆるく斜面を下りながら

一線の水道に口をつけてゐる姿を遙に見る、

太古より今に至るまで、

如何に悠久なる時を彼の牛は呑みつつあることだらふ。

凡てのものは輝き初め、  
靜かに力溢れて、

恰も廻り澄ました渦卷のやうに空は深く沈み、

地は花の如く微笑み開いて、

陶酔した太陽がゆつたりと雲の上に乗るかかると、  
沈黙の禮拜に世界は此のひととき釘つけとなる。

二二四

風よ、朝風よ、まどかなる心を以て  
谷底より森を吹き、草原を吹く、  
世界は明かなる光のうちに進み入り、  
刹那に變る木の葉のざわめき、枝のうなりは  
浪の湧き立つ荒海の鹽騒の如く  
天地をこめて限りなき音楽を轟かせ、  
嚴かに美しい朝の生命を、ひらけゆく爾の心を、喜び崇  
め、祝ぎ奉る。

(一九三三年 十二月)

### 星空に献ぐる頌歌

冬枯れの菩提樹の枝の間に  
透かして見える星空の美しさは  
微笑む聖者の眼よりも清しく、喜ばしい。

廣々として涯もなく、  
きはまりもない星夜の空に  
音もなく韻もない音楽が満ち溢れ、

溢るる所もなく渦巻いて、  
その恐ろしい形も相もない暴風が  
静かにひしひしと人間の心に押し迫まる。

彼の日大聖釋尊が  
菩提樹の下に静座して  
正覺を得給うた至上妙樂の法悦を  
見てゐたものは爾、星夜の空だ、  
美しい星空、聖なる星空、  
祝福せよ、祝福せよ、  
輝ける、久遠の大悲の眼をもつて、

星が降る、星が降る、  
眼に見えぬ粉雪の音もせず降るやうに  
大地の上に星の光は降り積る、  
柔かにまた寂しく、  
影淡けれども精氣ある夜の空より  
無限の平安と慈恵とは下り來たり、  
ひろびろと地一杯に擴がつて、  
喜びと感謝の光は深々と降りつもる、

暗いが明るい、

悲しみに満ちながら此の心一杯の歡喜  
 空も胸を傾けつくして星は降り、  
 獨り靜かに人はほろぶる、  
 寂黙として世界に聲なく、  
 唯水晶の如く澄み切つた無限の虚空から  
 金光燦爛たる星は降る。

廣々としてきはまりもない星夜の  
 そのきはまりもない喜びに融け入つて、  
 雪は星と降り、花は地に咲く、  
 空の景色に現はれる、

わが身の涅槃  
 ありとあらゆる煩惱をそのままに

大千世界の曼陀羅は恍惚として涅槃に入る。

冬枯れの菩提樹の枝の間に  
 聖者の眼と輝く慈悲哀憐の  
 限りなき星空を讃めたたへて  
 天上より大地に吹きしく、われは荒々しい氷の風。

(一九三三年 十二月)



草の葉の上に

草の葉の上に

小さな露、

露の上には遙々と、青空と雲とがうつつてゐる。

青空に浮かぶ雲は

太陽を背負ひ、

太陽は大空を背負ふ、

その空には大地がうつり、  
大地には草が生ひ繁つて、  
草の葉には輝く露。

天は地にあり、

地は天にあり、

その中有を生死の嵐が劫初より  
久遠の方へ鷲の如く吹き過ぎる。

天は地の影か、

地は天のうつる相か、

相共に照らし合ふ之れは二連の鏡。

三三

草の葉の上に

巨大なる光の露は輝き、

露の上には碧く、美しく、

寶石のやうに磨かれた

ささやかな一粒つぶの空。

(一九三三年 十二月)

## 泡

泡立つ海から生れるものは

眞珠、日本の島

浪に浮かんで

小舟のやうに

絶え間もなく、揺れる、揺れる。

眞珠の悲しみを爾おまへは知るか、

三三

それは相重なり合ふ  
 光と陰かげとが  
 入り亂れ、半ば消え、  
 臙やみに曇る昏迷あやみの心、  
 黄昏と夜の境界あやひに、  
 故もなく、揺れる、揺れる。

漂ひ流れるはかない島々、  
 涯もない大綿津海のまんなかにあつて、  
 目あてにする何ものもなく  
 進みもならず、歸りも得せず、

動と不動のけぢめもない間を、揺れる、揺れる。

一連の眞珠とも見えまがふ

日本の島

遙々と見おろせば

これはまたひとむらの泡、  
 おほ海のもなかに浮かび、  
 もの哀かなしくも懐しく、美しいその相すがたは、  
 限りも知らず、揺れる、揺れる。

浪立つ海から現はれ出づる

詩神にして美の女王

泡よ、

爾おまへこそはわが祖國、母なる土地だ、

おぼろめく光のなかに、揺れる、揺れる。

(一九三三年 七月)

### 牡丹の祈

何物も見えわかぬ闇の隅から

祈りの聲が細々と上つて来る、

渚の波のつぶやきか、遠海の轟きか、

はた緑に眠る森の奥の木霊の響きか、

そもそも谷間を走る小川の流れか、

悲しみの訴へがやるせなく聞えて来る。

光にあこがれる幾千の小鳥が  
 虚空一杯に群がつて、聲もなく羽搏き、  
 臃なる羽音は柔かにまるく暗を包み、  
 恐ろしい力で何處にかそろそろと推し移る、  
 その動搖の色を感じ、喧噪の音をかぐやうな、  
 闇のなかの深い悲しみと訴へ。

悶えの聲が次第に高まる、  
 爾の娘で私の姉妹、彼の妻なる彼女が  
 身をくづ折れて闇の底にすすり泣くのか、  
 眞つ白な牡丹の花が

力もなく萎れてうなじたれ、  
 わが眼の前に祈りを献ぐる氣配がする。

闇よ、燃えよ、燃え上り燃え盛れ、

光明よ、光明よ、

わが清淨の童貞をもつて、

わが處女の天福の美をもつて、

わが身、わが心、わが存在の凡てをもつて、

闇そのものが光となれよと一念に祈り、希ふ。

忽ちに輝く白熱の白き牡丹は

これ宇宙の蕊

闇黒の全世界がさながらに光明の大牡丹の花となり、  
永劫に動かぬ美を象どれば、

見よ、蜜蜂の如く牡丹の蕊を押しわけて、現はれ来る偉  
大なる唯一の神。

(一九三三年 六月)

### 早春の頌

1

わが苑の池に水は満ち溢れ、  
赤き鯉一つ、  
浮び上つて静に水の面を窺ふ。

久しい時の間

私は空しく待つたが、

嘗つて茲に影さす小鳥もなく、

まに浮ぶ水鳥とともない、

ただ潺々と水は溢れて流れ去るばかり。

盡きぬ怨恨があるならば

あの流れに果敢ない言葉も物語らう、

或はまた燃ゆる想念に心を焦がすなら

池のなかに身を抛げて

底の藻屑となるのさへ厭ふまい、

然し、私は待つてゐる、いつまでも

ただ唯來たるものを待つてゐる。

2

静かなる微風は、

角笛の如く柔かに吹き過ぎる、

樹々の梢を、又は下枝の葉の茂みを。

季節の王なる春よ、

今、爾は微風の駒に黄金の鞍を置き、

白銀の轡も軽く、ゆるやかに股がつて、輝きつつ來たる、

歡喜と希望とはその旗印、  
遙かに、艶めく群青の空を指す。

蹄の音は微妙なる音楽を

凡ての地平線より呼びさまし、

小鳥共は雲の間より唄ふ、

「天いなる王を稱讃へよ」と、

何處とも知れぬ世界の涯、海の彼方より、

あらゆる生きものは此の輝く王、

光明のなかなる光明を目差して

葬々と押しよせて来る、遠雷のやうに、海嘯のやうに。

廢れた苑の人知れぬあたり、

木の洞に巢喰うて、

蜜蜂の群は密に春の情緒をどよもす。

錦襦の袈裟法衣を纏うた長老は

眞白の髻に波打たせつつ、

嚴かに、黙々と苑の奥を歩み去る、

凡ての古きものを背負うて足は重く

消えんとする傳統の光はその後方に尾を引いて。



冬は去つた、  
 地の上を蔽ふもの、  
 固く冷めたく、愛なきものは凡て消え失せた、  
 伸びよ、伸びよ、胸一杯に開かけ、地の子よ、  
 しんしんとして木の芽は立ち、花はほころぶ、  
 両手を擴げて蔦地まつしぐらに  
 待ち憧れてゐた太陽の榮光は遂に來た、  
 聞け、澤山な子共の聲がする、  
 空一杯に、唄ひつれて、朝らかに笑ふ、「早春」。

(一九三三年 二月)

## 湖 心

靜かに清すしい朝は  
 今、白蓮華の如く、香り高く、  
 湖の上を目ざめ、  
 何處ともなく聞える、樂しげな、  
 數知れぬ魚類いさなのため息。  
 岸邊の丘や森の息吹いそぎが

微に湖心に通ふ、秋立つ氣配、

蒼空の晴れにも、

水の明るさにも、

將また汀の石に這ふ舟虫の足の忙せわしさにも。

廣々しさよ、冷めたいまでに

湖の廣々しさ、しめやかさ、

鳥も飛ばず、舟も浮ばぬ、

何物もない水の上に

悲哀かなしみか喜よろこ悦びか、うすうすと心の影をさす。

秋の日の鏡よりものさびて、

春の夜の燈火ともしびよりも仄かな湖の心、

しみじみと見渡す偉おほ大きさ、

湖うみは空に抱かれ

空は湖うみに融け入る所、晝と夜との結合がある、一つの世界。

罪を犯かした人間が

悔の心深く、懺悔の涙に泣きぬれて、單ひた更すらに、

赦免ゆるしを願ねがひ救濟すけひを求めるとき、

何時いつとなく涙は乾き、心も清すが々くしくなる、

恰度そのやうに湖はわが眼の前に晴れやかに寂しい。

罪人はわたしただ、

そして爾だ、彼だ、あらゆる人々だ、

鐘は鳴り、僧徒は朝の勤行を急ぐらしい、

いざ、ここ、この水邊に脆坐て頸垂れてゐよう、

無言に、ただ「自らの悪」を噛みしめながら。

彼の水と空との融合ふ境、一つの世界に、

頻りにわたしを招きよせるものがあつて、

涯もなく漂ひ行かうとする憧憬心切ではあるが、

遙々と傳はり來る黄金の音楽は、また、

靜かに響く、凡てのものに平穩あれと。

擾亂よ、懊惱よ、悲歎よ、憂悶よ、

光明あれ、世に光明こそあれ、

斯く念ずるかのやうに湖は

わたしの額の小暗い熱を吹きさまし、

苦しみ喘ぐ黒豎い胸の痛みを柔らげる。

憐愍の想ひ耐へずして

衆生の痴愚貪瞋を悉く受け入れようと願ふのは、

恰も己れ自ら湖心と一つになつたのかと思はれたが、

否、彼の朝の静かなる湖は  
廣々として限りない大悲の心、空とも水とも見分け難く  
人生ひさのよに連なる。

(松江にて、一九二二年 九月)

夕陽の光に

たつたひとり、私が  
早春の寂しい廣野に漂泊さまよひ出たのも、  
静に沈んでゆく太陽が見たいばかりだ。

朝から吹き荒れてゐた冬の風も  
とつくに野菜畑の上を通りぬけて  
遙かな森の後方うしろへ消えてしまつた、

あとにはただのんきさうに

群雀むらさぎが跳釣瓶はねつりびんの上で囀さえずりながら、

たつたり下おりたり、明日の日和あしたのひわを案あじてゐる。

黙もくつてゐてくれ、小さな兄弟、

何處どこからともなく音楽おんがくが聞える、

なんと云ふ静しずけさだらう、

空そらのもなかに、天上てんじやうの百合はくげの花が開くのか、

優しい處女をとめの婚姻けんこんふ祝いわひがあげられる

その歡喜よろこびの歌聲うたこゑだらうか、恍惚うつろひとした光ひかりのなかに。

美しく、寂さびしい、

けれども力強い今日の入り日だ、

悲しみか、はた深い喜びか、

光ひかりのなかに黙もくつてゐる牛うしを見ても涙なみだが流れる、

そして限りない光明くわうめいが世界せかいを涵ひたす、柔なかに、暖ぬかく。

ああ、山々さんざんの巔いたゞきに消え残のこつた舊ふるい雪ゆきが燃える、

抛なげ捨てよ抛なげ捨てよ、爾おまへの情念せむいを、

新しい春は今、

彼の連なる山々峰々の波打つ韻律リズムに

「久遠くわん」の生命いのちを焼やきつけようと急いでゐる。

莊嚴なる鎮魂樂よ、重々しく、  
最後の嵐が響き渡つて、（おお、太鼓にも似た鈍い一聯  
の轟き）

太陽は安らかに雲の奥所に落ち入つた、  
聖者の臨終の偉大さと美しさを以て、  
嘗つてあり、今在り、未來にもある永劫の神の美しさ  
を以て。

母親の笑ひが赤兒の面にうつるやうに、  
入り日の光りが山々に反照して

廣野が末、大河の流れや古沼の水面にまで、  
賢人は神の意志を了解だらう、  
世界は愛だ、森羅万象は光明だ、おお、  
生活は救済だ、遙々と目をあげれば目路の涯まで光明だ。

たつたひとり、私が  
早春の荒れた廣野に漂泊ひ出たのも、  
入り日のあらゆるものの上に  
靜に君臨する、夜のやうに廣々とした  
深い、寂しい大空が見たいばかりだ、  
一切を抱き藏む無限の愛の蒼空が。

（一九二二年 四月）

## 莊嚴心

愛よ、憎みよ、悲愁よ、歡喜よ、と  
 酔ひどれの波は砂を嚙んで  
 ことごとくに呟き、呟きつつ、  
 渚の上をよろよろと蹣跚てゐたが、  
 夕靄が下りて柔かに世界を包んだ時、  
 遂々それは黄昏の暗の底に  
 聲もなく、心も崩れ、とろとろと眠り入る、  
 衰へ勞れて。

遠い空には鐘がなる、その淑やかな喚聲は  
 水のやうに澄み切つた空気を慄はせ  
 靜かに、靜かに、打ち揺らいで、  
 忘れられた人の靈魂を呼び覺ませる、  
 その空は、水淺黄、妙へに明るい天童の瞳の色、  
 入り日の後の香氣が漂ひ流れて、  
 一つ二つ、眞つ白の斷れ雲に映る、  
 淨く、美しく。

中天に聳える強い輪廓の「比良」の大きさ、此の上もない立  
 派さ、

のびやかにそそり立ち、おつとりと眼をつぶつて、

純白のその頭に深々と雲の羽毛帽子、

胸から下は夕闇に掻き消されたまま

徐々と假睡みかける嚴そかな心、

隈もなく、遙々と空は晴れて

唯一つ残つたその嚴かな雪の巔を

微かな薄ら明りが薔薇色に染めながら

緩く、しみじみと消え去る、果敢なく、もの悲しく、又

歡喜の眼を以て。

廣々と湖は澄み渡り、

風もなく、もの音もなく、

磨き立てた鏡の面のやうにひつそりと、

静かに透徹して、明るく、

華やかに、そして寂しい、

槽ぐ舟もなく、飛ぶ鷗もなく、

唯玲瓏として肌寒く、くつきりとその上に

眞つ白の雪の巔を、嚴そかな老齡の

「比良」の姿を寫してゐる、近く、親しく、けざやかに。

ためらつてゐた黄昏の光は消え、

湖の上も、連なる山々も、



凡て單調に黒く、懶く、夜の衣に包まれて、  
 早や闇ばかりが冷やかに  
 壯嚴なる大空を一杯にはびこるけれども、  
 彼の積雪の山巔のみ獨り寂しげに、  
 然し強く、美しく、又純白の誇恃を以て、  
 嚴そかに聳え立つ、高く高く、彌高く、  
 見上ぐる心の眩しさ、清やかさ、  
 宇宙の意志を茲に煌々と燃やしながら、  
 静かに、徐々と消えてゆく、彼の山は、彼の巔は、彼の  
 積雪の純白は……

（一九二二年 十二月）

## 枯野

小鳥は木々の梢に數鳴く、  
 その木々は黄に赤に紅葉が照り、  
 秋も既に晩い、  
 どの田もどの田も稻を蒔られて、  
 そここゝにわびしげな藁によの列、  
 黄昏れ時のうすら寒さに、  
 焚火する人の火影がちらちらする、

穉色の遠い野面に細ぼそと煙が立つ。

二五四

山の麓の雑木林に、啄木鳥が鳴く、百舌鳥が鳴く、  
吹きつゝのる凧の後から直ぐそこへ冬が近い、  
路傍の枯れ芝は仄白く霜にさびて、  
迂散臭そうに嗅いでゆく宿なし犬、  
水々しく空は晴れた、晴れた、  
谿底の泉の如く澄み切つて、  
聖者の臨終の悲愁と平安とがある、  
入り日の空は晴れた、晴れた、泣きぬれたあとの瞳のや  
うに。

遠い野面に細ぼそと煙が立つ、  
此處鹿ヶ谷法然院は今誦經の聲に満ちて、  
木々の枝を吹く木枯のなかにもう冬がやつて来る……

(一九二二年十一月)

鳳仙花と子供

秋立つて、午後の日射しも

さやさやと涼しい

雑草しづかの茂るあたり

風は音もなく吹きめぐる、庭の隅。

こわれた垣根に牽牛花あさぎの蔓がからんで

昨日も今日も花が咲く、色さまざまに、

鳴く虫の聲も微かな慄へを

晝の光に傳えては消える静寂しづけさ。

何時ともなく赤ん坊がひとり

咲き亂れた鳳仙花の下に座つて

朗らかに笑ひつつ遊んでゐる、

無心に両手で赤い花をむしりながら。

誰が植ゑたともなく咲き出た

鳳仙花の清らかな花片はなびらがこぼれる、

赤ん坊の手からほろほろと露のやうに、

落ちて地面に散布いて寶石の破片のやうに。

二五八

空は晴れて碧く、光に溢れて  
白い浮き雲がそろそろと崩れ、  
その雲の柔かく、  
軽きがままに

赤ん坊の笑ひがうつる、華やかにうつとりと。

鳳仙花は地面に赤く散り、  
赤ん坊の朗かに笑ふ大きな笑ひ聲は  
空に響いてはるばると涯しもなく、

赤く、美しく、夕陽の如く、雲にうつつて、  
その歡喜が虹となる。

(一九二一年 九月)

月の悲しみ

魔王共よ、黒猫共よ、  
雲を呼べ、暴風を呼べ、  
今宵は月の十五夜である、  
彼の青褪めた、象牙色の顔に化粧して、  
土耳其渡りの綾羅を打ち被つぎ、  
基督様の御世から今に萎ばぬ  
シオンの谷の眞白の百合花のやうに、

月は細そりと立ち現はれ、  
無限の空の大湖を水鏡、己が姿を寫し見て、  
ありし世の光榮を茲に思ひ偲ぼうとする、  
鏡は曇れ、湖には波立て、  
世は燎亂の卷となれ。

魔王共よ、黒猫共よ、  
雲を追へ、暴風を静めろ、  
さてさて汝等は愚かな奴である、  
月こそは聖母瑪利亞様の御歎き、  
永遠童貞女となり給ひし御姿なればこそ、

人の世の貧しき子等を打ち眺め、  
 柔かに微笑み、また物悲しくも伏目となつて、  
 徐々と両手から祝福の冷めたき水、  
 哀憐の御涙をふり落しつつ歩み去り給ふ、  
 われ等が世の唯一つの慰安であり、救済である、  
 雲は飛べ、暴風は消へ失せろ、  
 世は寂靜の都となれ。

魔王共よ、黒猫共よ、  
 雲も呼べ、暴風も呼べ、  
 汝等の好き氣儘にするがいい、

寂靜も平安も俺にはも早や用はない、  
 如何に虚空界が惱亂し昏惑するとも  
 いつまでも唯獨り、冷めたく潔きわが身である、  
 よしなや、今は穩樂微笑の境界も、  
 完全無缺の形相美も、惜氣なく打ち捨てて、  
 その昔、苦しみ悶へ、情熱と痴愚とに、  
 世を呪咀うた頃こそほんに戀しく懐しい、  
 いざ、雲も立ち舞へ、暴風も渦巻け、  
 世は擾亂に黒々と掻き曇り、此の俺を永遠に閉ぢ蔽うて  
 くれい。

(一九二一年 七月)

序曲

—— 未來の或る交響樂の前に  
附けらるべき

太陽の輝くなかに  
轟々と響きして落つる  
高原の巔の雪崩れの如く、  
碎け散れ、碎け散れ、  
神の御前に

かたくなの我が惑ひ心。

連なる山脉の、彼の

壯麗なる純白は

強く、きびしく我が心の上に聳り立つ、

ああ、その素朴の相は

深い紺碧の空に、鮮やかに

偉大なる祭壇を築き上げ、

又嚴かに祈禱の言葉を生み、

形のない香の煙は濛々と世界を超へて渦巻き昇る。

何處ともなく隠れた小鳥の

細々と數鳴く頌讚のうた聲は

孱弱いながらに春が近いと告げるけれども、

愚かなる我等の心は

穂尖き氷の如き冬の利鎌に刺し貫かれて

何時までも凝て切つた地面を匍匐廻らうとする。

忽ち襲ひ來たる激しい霰は

山を包み、谷を蔽ひ、

一刹那、我からだを押しつつんで、

全世界は眼前に唯眞白の花と開き、

わが心を心にして煌々と燃えようとする、

大光明の燭の火が

焰の翼に天を蓋ふて。

幻のみ、雪の上を逍遙ふ影像のみ、

私は慄えつつ、巢を失うた獣のやうに

高山の麓の裾野が原の路に迷ひ、

あてもなくただすみ、歎息つき、

彼の雪を着た山々の

黒々しきひだと純白の斑点との

明確なる輪廓を眩ゆく見上げて



強く激しい精靈のわが魂に下るのを待つのみ。

二六八

太陽の輝くなかに

轟々と響きして落つる

高原の巔の雪崩れの如く、

碎け散れ、碎け散れ、

神の御前に、

かたくなの我が惑ひ心。

(一九二二年 四月)

### 光の献詞

わたしは光を献げる

偉大なる神の御前に。

燃えよ、燃えよ、

ただ孤つ

暗のなかに輝く光は

一念澄んで、自から

二六九

二七〇  
瞼に溜まる涙の如く  
唯わけもない感謝の心。

しんしんと燭の焰は燃え立ち  
その上に暗は重なる、  
抗がはず  
また躊躇はぬ  
静に、 厳く輝く光よ、  
その前にわたしの心があり  
その後うしろに神がある。

二七一  
献げる心はただ一つ  
受ける神もただ一つ  
燃ゆるものは焰ばかり、  
何物もない暗のなかに  
神と心が融け合つて  
恍惚として聲もなく  
燦爛として光を放つ、  
涙のやうな光明を。

犠牲の精神でなく  
苦しき忍従でない  
無限の感謝を以て

抛げ棄てる私の生命の

その血の一滴さへ

燃やし盡くして惜からぬ此の現心。

燃ゆる焰は私であり、神であり

同時に神でも私でもない

陶醉した一存在が

前後不覺に唯燃えて

明るい光りを放つばかり、

それをめがけて、葬々と

重たい暗が押しよせる。

廣々とした夜の

聲もなく、形もなく

底知れぬ深いどよめきが

唯孤つの燭の火に蔽つ被さり、

呑みつくさうと焦慮り立つが

光明は身動がぬ、

壯嚴かに明るく、行ひ澄まして。

やがて時は移り

大千世界の流轉は過ぎ

燭の焰の漸く終末をまりに近づく時、  
 益々せまる厚い暗は  
 執念深く押し倒さうとのしかかり、  
 光は弱く、蒼ざめて  
 慄ひ且つ戦き、苦惱する。

倒れてはまた立ち上り  
 敵に向ふ、物凄  
 彼の戦場の猛者の如く  
 消えようとしては、再び燃え、  
 燃えて戦ひ、戦ひつつ消える臨終の

悶もたえに喘へぐその光明。

光が遂に最後の息を輝かして  
 すつかり消えた後は暗黒  
 否、闇もない、神もない、私もない、  
 唯無明ばかりが存在の上に眠つて、  
 運命の自鳴鐘こけいがもう一度  
 光と闇とを分けるべき  
 彼の魔法の数を打つのを、獨り待つてゐる。

さりながら、今こそ見よ、

光は消えず、闇も失せず、  
 闇と光との飛び去つた  
 「無明」の存在全體が、隅から隅まで  
 赫耀として燃え立ち、焰となり  
 大千世界が唯單に、光り輝く  
 永劫不滅の大光明と現するのを。

(一九二二年 二月)

星夜の銀杏樹

立ち騒ぐ木の葉は  
 鋼鐵の如く火花を散らし、  
 揺らめきながら  
 焰を吐いて  
 黒い銀杏樹は眞つ眞ぐに  
 底もない夜の空を刺し貫いてゐる、  
 悩みか、哀願か、

そもそもこれは絶え間ない憤りか、  
否、

私は聴く、

あらゆる物と戦ふ意志を、無限の意志の戦ひを。

私は聴く、

洪水の如く

漲り、溢れ、

恐しい力で氾濫する音楽を、

その巨濤は宇宙を遍ねく洗ひ去り

暴風の如く吹きまくる、

ああ、荒々しい生命の暴風を呼吸して、

心臓は氷る、

斯くて爾は燃え、私は燃え、宇宙は燃え、

爾、燭の火の心の如く

強く、嚴肅に燃えたつ銀杏樹よ、

爾は吹きつける、全世界に、

氷のやうな、激しい、永遠の歡喜を。

海風よ、海風よ、

軽く、大らかなる精神よ、

無限に廣々しく

眩惑する

宇宙の大洋に向つて

私は靈魂を解き放つ、

新しい帆船の如く孱弱く

然し希望に満ちた靈魂を、

航海は楽しく、恐しい、

さあ、錨を上げろ、追風だ。

数えきれぬ、

幾萬の星の群れは

煌々と光りの尾を打ち振つて

巨濤おほなみに揺られながら、夜光蟲の如く、

宇宙の大洋を乗り切り

わが靈魂の航路をめがけて、猛然と、

一齊に押しよせる。

ああ、蒼白く盛んなその合唱を聞け、

黒々と焰を吐く銀杏樹は

星の光の雨と降る蒼穹そらの下に聳え立つて、

自おのづかから言葉を生み

瓢盪として舞はうとする、

此の時、天心は二つに裂け

恐ろしい生命の火の洪水を  
宇宙に遍ねく漲らす、  
あゝ、そこに溢れる私達の精神よ、  
光、光、光………

(一九二〇年 十月)

静かなる嵐

目には見えず  
耳にも聞えない、  
ただ額の上に  
昆虫の觸角の  
微かな動きを、  
薄羽絲遊の羽搏く  
けぢめもない空気の揺らぎを



宇宙の心臓の波打つ  
明るい韻律を私は感ずる。

日は高く、  
光が梢を通して踊りながら  
柔かく、ちらちらと落ちる所に私は在る、  
眞夏の午後の深みに  
音もなく生命の晶玉は燃え、  
とろとろと蠟涙を流す如く  
私の心は愉悅に満ち、  
歡喜に溢れ、陶酔する。

取り巻くものは  
緑の影、  
枝越しに見える湖は  
全面太陽に開いて  
百合の如く新鮮だ、  
おお、靜に嗅げ、  
茲夏草の上に降りそそぐ  
天上の百合の香りを、  
聖い膏のやうに心盪かす蜂蜜を、  
豊饒な八月の贈物を私は両手に受け  
受けながら尙溢れこぼれる。

何時か、

私は此の静かに渦巻く暴風あらしを歌はう、  
何事もなく、

枯れた木の葉が一枚

蜘蛛の糸にひつ懸り、

微風そよかぜさへもなくて

目前に

ゆらゆらと揺れ動いてゐる、

その偉大おほいなる力を爾おまへは感ずるか、

宇宙の意志を、意志そのままの顯現あらわれを。

静かなる林の奥に座し

ただ獨り觀み、且つ感ずる者は

私か、私以上の爾おまへか、

茲眞夏の午後の深味に

黄金こがねの豹は音もなく身を伸ばし

身構へる、

全身柔かに燃えながら。

(一九二〇年 九月)

歡喜の贈與者

(愛するM・Fに)

1

八月の空の盛んなる光耀よ、  
 私、曠野の上の陶酔を喜ぶ者、  
 蟬と蒼蠅のうなりに合唱して  
 私は爾を唄はう、  
 私達のなかなる爾

爾達のなかなる私の歌を  
 流るる風の渦巻くなかに  
 惜しげもなく播き散らさう、  
 彼の田畑の上の鷹様な播種者のやうに。

疾風よ、颱風よ、  
 浮薄なる内實なき者は  
 もみ殻の如く吹き飛ばされてしまつた、  
 いざ、來たれ、創造の偉靈よ、  
 私は私の蔽はざる  
 裸形の肉身を以て爾を迎へる、

爾の唯一の神聖なる祭壇を以て。

2

おお、爾プロメシユウスの子よ、

藝術の創造者よ、

偉大なる爾の父祖の如く

絶えざる戦ひを以て

人類にまで神聖の火をもたらした

運命の戦士よ、爾は立つ、靜に雄々しく。

3

常に若々しく

餘りに豊饒なる生命に満ちたる

青春の人類に取つては、

人生は唯、

苦惱と悲痛である。」と

不吉なしわがれ聲で繰返す

彼の老ひばれた鳥共の歎息も眞理だ、

生命が豊饒に過ぎるが爲めにと云ふ限りは、

不斷に生命餘剰に壓倒されるが故にと云ふ限りは。

そして、おお、爾藝術の創造者よ、  
爾こそ此の人類にまで  
歡喜と愉樂との唯一の贈與者だ、  
苦惱と悲痛との人生を鍛えて  
新しくそれを創造する所の。

4

太陽の光に満ち溢れた曠野の上に  
黄金の巢を營む蜜蜂のうなりは  
宇宙諸星の運行の

音樂の如く、靜に輝やかしい。

然も見よ、そのなかに安座して、  
女王蜂は黙々と産卵する、  
全王國に奉仕され  
また自ら全王國に奉仕しながら。

5

斯くの如き相を私は見る、  
人類にまでの歡喜の贈與者の上に

おお、爾プロメシユウスの子よ、  
藝術の創造者よ、

人類に火を與へた者の運命を爾も荷なふ。

爾自ら永遠の苦惱に呪はれつつ

生産を以て全人類に奉仕し、

全人類はまた勞作を以て爾に奉仕しつつある。

6

私は永遠に新しく、美しい、

歡喜と愉樂との不滅の炬火を

苦惱の人生を生きる人類にまで贈らう、

私は詩人、それを捧げる、今確に。

八月の曠野の風よ、

輕やかな蒼穹の息吹よ、

いざ、この炬火を華々しく吹き散らせ、

荒々しく吹きつけろ、

彼の悲痛に惱める人類にまで、

盛んな愉樂を、

私、生命を盪盡する歡喜の贈與者のむき出しの兩手から。

(一九二〇年 八月)

成長

どしどしと重く、無慈悲に  
人類の上に、

踏みつけて行つた「時代」の  
大きな足跡を私は見る。

そして此處に孤座しつつ私は聞く  
その強壯な足音を、

遠い雷鳴のやうな響きと  
土の叫喚さけびの氣味悪い地響きとを以て。

此の大きな足跡を私は見る  
破壊された人類の仕事の上に、  
崩れてしまつた丘の古城の上に、  
半ば埋められた堀割の水の上に。

此の恐ろしい足音を私は聞く  
天主閣の址の椎の森に、  
角櫓すみやぐらの石垣の生ひ繁つた草叢に、

空吹く風と風とのひしめき戦ふ見えざる所に。

二九八

ああ、永遠に絶え間もない「時代」の成長よ、  
彼はあらゆるものを足下に蹂躪つて  
驀地に押し進んでゆく、  
躊躇はず、また顧慮する事もなく。

心配するな、

人類も決して後に取り残されてはゐない、

「時代」は進む、そして人類は進む、

破壊されるのは彼の脱ぎ捨てた殻ばかりだ。

然し見るがいい、

自然も又永遠に成長する、

それは常に若々しく、美しい、

常に清新で力に満ちてゐる。

廢れてしまつた城壁の下に

水田と野菜畑とで半ば埋もれた堀の水は

見る影もなく涸れて藝が浮いてゐるが

見ろ、夏の朝を咲き誇る蓮の立派さを。

二九九



静かな淡紅色の蓮の花辨はなびらは

初陣の若武者の微笑む頬と、

惜し氣もなく流した血潮を思はせ、

その落城の日の悽愴な幻像まぼろしがまざまざと押しせまる。

次第に遠くなる「時代」の足音は

落日と共になたの空に消え失せて、

美しい蓮の取り巻く古城址ばかりが

恰も人類の成長の脱皮のやうに地上に黒く残される。

成長、成長、ただ成長ばかりが在る……（淀城趾にて、一九二〇年七月）

### 冬の想ひ

苟かりそめの熱に病む身を

毛皮けがしの衣につつみ、

あかあかと燃ゆる焰を前にして、

益やうもない憧憬あこがれに唇渴き

胸は押しよする憂鬱に息づまる。

折柄咽喉太き牡牛のうめきの如く

虚空遙かに笛の音を響かせて、

悠然と出帆する諸威捕鯨船は

今宵月明の波の上に航路を見失ふであらう、

氷海の怪しき光に羅針盤は狂ひ舵機は酔ひ痴れて。

されど窓を打つ霞の如く急がしく

戶外に黄なる銀杏樹の落葉は

壯麗に香りも高く、

うかがふ眼には稍の枝々骨立ちちて

晝の月ほのかに懸かる。

想へ、かかる時尙古き墓場を

老ひ疲れたる痕の

餌に饑ゑたる如く逍遙ふ人あり、

額には黒髪亂れ蒼ざめて

時雨を伴ふ冷めたい風は薄笑にねじけたるその執着の頬

を打つ。

ねばつく口には葡萄酒をふくみ

重き印度の聖典を慄ふ兩手に支へ持つて

われ開くでもなく黙してあれば、

柔かに暖き鳩の聲は風の騒擾とまざり

痛く鋭き百舌鳥の叫喚は滑らかなる焰の舌に吸ひこま  
れる。

三〇四

早や日は沈んで夢を誘ふ黄昏時、  
書室のうち暗闇を増せば薪をくべ  
暖爐はあかあかと燃えて壁掛に反射し、  
ふと浮かぶ故き母の面影は美しい  
限りなく懐しく我は呟く、「昔の愛」と。

燃ゆる焰は獨居の守り神、よしや  
戸外に黄なる银杏樹の落ち葉を踏んで

死を背負ふ冬がわが書室を窺ふとも、  
恐れず我はその跫音に聴き耽らう、  
わが母と暖爐の火照に快よく微笑む顔を見合せながら。

(一九一九年十一月)

## 題言

私は竹内勝太郎君の第一詩集『光の献詞』が大正十三年七月にあらはれてから、同年九月には第二詩集の『讃歌』、翌年三月には第三詩集の『林のなか』、更に昨年六月には第四詩集の『春の樂器』と、その詩稿が續々出版されたのを、毎回ただいて愛誦してゐました。

雄渾なる詩想を、絢爛な美辭と莊重な格調とを以て歌つた其の作風の高邁は、京都における詩壇の新聲として、私とその都度ひそかに推稱措かなかつた所であります。ここにもかしこにも雄々しき感激の響が充ち、弱々しき感傷の音はいづこにも聞くことができません。迸る熱情と溢るる生氣とを制御しつつ、麗句を弄して、層一層と高調に達してゆく作者の意力は、眞に天馬空をかけるの概があるとしても申しませうか。讀誦の際、私として或時は老いの追蹤をゆるされなかつた場合もありました。尤も辭句の洗鍊を缺いた所もない

とは云へますまい。或は優麗の情趣に乏しきかの憾が感ぜられないのかもしれませんが。詩想の奔放に任せた擧句に、まま見ゆる文字の生硬と譬喩の奇異とは、私のむしろ惜んだころなのでありますが、私がいつもの如くそこに典雅と沈静とを求めたならば、それは却て詩家の意に背く事でありましたらう。或時には、私はせめて私の好み求むるリリカルな心緒をたどりたさに、作者が青年期の戀愛詩の若干篇をよませてもらつたこともあります。

ともかくも、私はこの三四年の間、をりにつけて、竹内君の詩集をば、夏の日の旅行に懐にしたこともあり、冬の夜の爐邊に吟じたこともありました。時には力なき私の秃筆を以て江湖に薦めようと企てたこともありません。なほまた四つの集はもと／＼同君自身の試刷ともいふべき程の、あまりに素朴すぎた形と窺はれたものでありましたから平素愛誦してゐた私からは、せめて一とほりの體裁に改装して世にあらはされてはどうかと、何度かお勤めして見たこともあります。

かういふ執心をもつてゐた私は、竹内君が今度、既刊の詩稿と新作の諸篇とから、精華を抜き来たつて一冊の選集を作り、それに『室内』といふつましやかなゆかしい名をつけて、而もそれが創元社の矢部君の詩文を愛するの誠意に基き、更に詩人と親交ある船川畫伯の意匠を加へて、將に美裝を調へて世に出されるまでに進んだといふ話を聞いて、こんな嬉しいことはないと思ひました。かうなると、何か一言添へるやうにとの懇囑に對して私は欣然お受けいたすの外はなかつたのであります。そこで私は唯ありのままに當初からの眞情を抒べておこたへすることにいたしました。

昭和二年九月二十六日夜

新 村 出

詩集室內

定價貳圓參拾錢



昭和三年一月五日印刷  
昭和三年一月十日發行

著者 竹內勝太郎

發行者 矢部良策

印刷者 松本米藏

大阪府西區上通一丁目  
(株式會社) 印刷谷  
大阪府東區鶴橋天王寺町

發兌

東京市芝區二本樓西町二丁目  
大阪府西區上通一丁目

創元社

振替東京一五六五  
大阪五七〇九五

著 郎 次 口 關

鴉 戲 曲 集

戯曲集「鴉」は我が劇界に新しい黎明を告げる一つの聲である。著者關口次郎氏は數多い劇作家のなかで眞に、新人として今や確かな地歩を占めるに至つた。こゝには人間生活に對する深い愛と鋭い洞察と、善き諷諷とがある。  
兄弟の反逆的行爲に依つて社會から追はれる青年の狂的な心理状態、乞食と云ふ最下層級にも尙失はれない強い人間愛と高さを欲する心、道德の假面の下にあえぐ醜い夫婦生活の破産、それ等のものが、まさまさと描き出され、短い一場面のなかにすら複雑な人間の心の姿を掴み得た巧みさ、それは悉く近代人の生活種々相であり生活の内部に潜んでゐる精神的危機である。  
限りなく人間生活を愛する人々よ！我々は、暗い心の奥底に光を導き入れるこの「鴉」の聲に耳をかたむけ、今一度我々の心的生活のまことの姿をはつきり眺めやうではないか。

錢貳拾料送・錢拾八圓壹價定

著 董 泣 田 薄

筆隨 猫の微笑

泣董氏の隨筆は天下一品である。智識の洽博、詩味の豊富、ユウモアの巧妙、諷刺の辛辣を経緯として織成せる最高の心境は、何人の追隨をも許さざる氏獨特の壇上である。  
本書は氏が最近の隨筆一切を網羅せるもの、この詩人の自然と藝術に對する思慕、人生の諸相に下したる諷刺皮肉は、洵に心憎き迄に情趣豊かなる筆に描出せられて、何人も微笑を浮べずしては讀過するを得ざるに相違ない。試に本書四百餘頁の孰れの一頁にても開き見られよ。諸君はそこに極めて興味ある人生の事實と情趣ある著者の談話振とを發見して愉悅に堪へないものがあらう。別に附録として氏の舊著「泣董小品」、「落葉」より佳作數篇を纏めて巻尾に收容してゐる。(四六判四百三十頁コットン紙箱入美本)

錢八拾料送・圓貳價定

園 賴 三 著

藝術  
隨筆

怪奇美の誕生

「怪奇美の誕生」は珍奇だ。しかし単に術ふのではない。著者は云つてゐる「私の魂は冥府をかけめぐつた。……黒い影につつまれた悲哀や苦惱、とるに足らぬ平凡なもの、哀れに愚しきもの、それらの中にすら美を見出さうとする。……所詮美に依つて魂の解脱を切望するものだ」と美を求め、善を探究し、人生の深き愛に徹せんとして、命がけでなやみ苦しめる一學徒の心境記録、深刻にして清新、高雅にして大膽、珍奇にして眞摯なる著者の筆致には、讀む者の心を感激で打震はすには置かない力と熱とが籠つてゐる。行文亦珠玉の文字にてつらねられ全文皆詩であり、芳香高き藝術の隨筆集である。

挿畫三十葉は皆特異清新なるもののみを蒐め、行文と共に獨特の興趣をそそる。

定價貳圓五拾錢・送料拾八錢



終

